

Title	ことばが映し出す世界観と象徴的暴力 : 「部族」という表現を問う
Author(s)	沓掛, 沙弥香
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 426-430
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68231
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ことばが映し出す世界観と 象徴的暴力

「部族」という表現を問う

沓掛 沙弥香

大阪大学大学院言語文化研究科 博士後期課程

2017年の夏、米国の女性誌「アルーア (allure)」の編集長が「アンチエイジング (老化防止) という言葉はもう使わない」と同誌のウェブサイトで宣言した。「加齢とは戦わなくてはならないもの」という誤ったメッセージを強化していることを問題視してのことだ。また、秋には日本遺伝学会が、遺伝学で使われてきた「優性」、「劣性」という用語の問題性を踏まえて、「優性」を「顕性」、「劣性」を「潜性」に改定した。

これらのことばは、単に慣用的に使われているだけで使用者に差別意識はないため、わざわざ騒ぐ必要はないのではないかと考える人もいるかもしれない。しかし、そのような表現が社会に定着することで、特定の社会的序列を前提とした価値観が刻み込まれ、その転換の可能性が阻まれるという点で、実際には大いに問題なのである。

慣習的用法によって無自覚に繰り返されてきた表現の不当性に社会が向き合い、差別的文脈の無効化を試みようとするこれらの動きに関連して、この場を借りて考えてみたい問題がある。

それは、「部族」、「～族」という表現についての問題である。

これらの表現は、「問題がある」という認識がされてからずいぶん時間が経つ「古い問題」であるにも関わらず、研究者もメディアも、曖昧な態度を取り続けていて、棚上げ状態にある。

「アフリカ地域研究」と「社会言語学」を専門にしておきながら、私

自身がこの問題に対して沈黙して、日本の言論空間に蔓延るアフリカ蔑視に一役買うのは大変不本意なことだ。そこで、この場を借りてこれらの表現をめぐる問題の諸相を整理し、これらの表現の使用に対して問いかけを行いたい。

『広辞苑』(第6版)を参照すると、「部族」ということばは以下のよう

人種・言語・文化などの特徴を共有し、一定の地域内に住んで同族意識を持つ集団。文明に属するとされる集団には使わず、未開とされる地域の集団に適用されてきたという点で偏見を含む用語。(下線筆者)

しかし、「偏見を含む用語」という認識は一般的には希薄で、多くの人が悪気なく使用している状況がある。特に、アフリカの人々を表す場合、根強くこの表現が使われる。

「～族」という言い方は、「部族」とされる集団に呼応し、それに対して「～人」は「民族」に呼応するのが一般的である。「部族」という語は、tribeの訳語として使用されてきた。もともとラテン語で「野蛮」の意味のtribusに由来するtribeは、アフリカなど一部の地域に住む人たちに対してのみ使われてきた歴史があり、西欧側からの偏見を根底に含む。社会的集団に関する研究が進むと、どの地域の社会的集団も等しくethnic group (エスニック・グループ/民族集団)と呼ぶようになり、日本でも、研究者の間で「部族」という用語に対する問題意識が共有されるようになった。

しかし、日本語では、「民族」はnationの訳語としても使用されてきたため、「部族」をやめて「民族」にすればよいという傾向に抵抗を感じる研究者も少なくなかった。また、アジア研究者には、(特に日本以外の)漢字を用いる文化圏において、「～族」という言い方自体に侮蔑的な意味はないため、アジアの諸民族に対して「～族」という表現を使用することに問題はないという主張がある。

さまざまな立場からの見解や態度が交錯した結果、「部族」、「～族」という表現が問題を含むこと自体は確認されているものの、ではどうするのかについては、研究者の間ではっきりとした答えが出されないままになっている。

また、メディアにおいては、未だに特定の地域の集団に対して「部族」、「～族」という表現が用いられている。少し前の話だが、1990年頃に激化した旧ユーゴスラビアの紛争が「民族紛争」と報道されたのに対し、同時期にルワンダで起こったジェノサイドは「部族抗争」と報道されたということがあった。これをきっかけに、一部の研究者とメディアの間で論争が起こったらしいが、現在でもメディアでは、北側／西欧に属する集団に対しては「民族」、「～人」、南側／非西欧に属する集団に対しては「部族」、「～族」が使われる傾向が見られている。

「民族」と「部族」を分ける理由として、「民族の方が大きく、部族の方が小さい集団である」とか、「国家を形成するのが民族で、しないのが部族である」と言われることもある。しかし、実際の使われ方は、そうはなっていない(表1)。

表1 いくつかの民族に対する新聞表現と頻度

用語	サーミ		ヨルバ		バスク		ガンダ	
	人/民族	族	人/民族	族	人/民族	族	人/民族	族
新聞社								
朝日(1985～)	6	5	5	68	68	0	0	11
読売(1986～)	7	0	3	42	44	0	0	1
毎日(1972～)	7	2	3	16	35	0	0	1

北欧諸国やロシアの少数民族サーミ人の総人口は多くても15万人ほど、ナイジェリアのヨルバ人は3000万人ほどだが、「サーミ族」という呼び方はあまりされないのに、ヨルバの人々には「族」が使われる傾向が強い。また、スペイン／フランスの少数民族であるバスク人は国家を形成しないが、「バスク族」とは呼ばれない。一方、「ガン

ダ人の土地」を意味するウガンダで最も人口の多いガンダの人々には、「族」が使用されている。

実は、共同通信社による『記者ハンドブック——新聞用字用語集』(第13版)にも、「○○族、○○部族の表記は原則として避け」るべきと書かれている。それでもなおこのような表現が使い続けられている状況は、日本のメディアのアフリカ報道に対する姿勢を物語っているとも言える。

さて、「部族」という用語が「偏見を含む」ことは、既に辞書にも明記されているのだが、既出の『広辞苑』の説明からは、「部族」という用語の使用者が、社会進化論のドグマに陥っていることも露呈する。簡単にいうと、「アメリカやヨーロッパは進んだ国々」で、「アフリカは遅れている」という恣意的な現実認識が、無自覚に前提とされてしまっているのである。つまり、この表現を使うことは、世界人類の歴史は一つの方向に向かって進んでいて、その方向を目指すことこそ「進歩」であるという世界認識を肯定するという危険性もはらんでいることになる。

社会言語学者のましこひでのり氏は、「言語が差別行動の媒介として機能するばあい」に関して、被差別者の個性を否定し好ましくない性格へと矮小化することで、差別者と被差別者の優劣関係を固定化しようとする戦略が、差別者によって無自覚に取られることを指摘している。差別者には明確な自覚はないため、そこで取られる差別戦略があまりに一般化＝慣習化した場合には、「象徴的暴力」が意識化されない場合も少なくないという。日本の言説空間における「部族」、「～族」という表現は、まさにこれに該当するものになっているのではないかと思う。

個々の国々、個々の社会、個々の歴史、個々の複雑な現状、そしてなにより、グローバル化を通じた日本社会との密接な関係など全く無視した上で、「アフリカ」とは、「未開」で、「遠い」、「遅れた」、「伝統的な」社会であるとして、時に嘲笑し、時に自らの慰めとし、時に身勝手なノスタルジーの対象とする。「部族」、「～族」という表現は、

その使用者の自覚の有無に関わらず、「アフリカ」を矮小化し、アフリカ側からの変化や挑戦を無いものにする「象徴的暴力」の一部を構成しているという事実が浮かび上がってくる。この問題に気付いたとき、私たちはそのようなことばを使い続けることを望むだろうか。

参考文献

一般社団法人共同通信社

2016 『記者ハンドブック——新聞用字用語集』第13版、共同通信社。

ましこひでのり

2002 『ことばの政治社会学』三元社。